

両親のとらえた子どもの生活と遊び (4)

—遊び場と子どもの発達—

○大 桃 伸 一
(県立新潟女子短期大学)

梅 田 優 子
(県立新潟女子短期大学)

I はじめに

第4報では、子どもが安心して遊べる場所が15年前と比べてどのように変化しているのか、また、それが幼児の発達や経験等に如何なる影響を与えているかについて、新潟市の5・6歳児をもつ保護者を対象とした調査をもとに検討する。調査の対象・時期・方法は「両親のとらえた子どもの生活と遊び(3)」と同じである。

II 遊び場と子どもの発達

(1) 近くに子どもが安心して遊べる場所があると答えた人は15年前の83.2%から77.8%に減少した。また、「それはどんな場所であるか」と尋ねた結果は表1のとおりである。15年前と比べて、空き地や神社・寺の減少が大きい。そして、遊び場全体において公園の占める割合が10.4ポイント高くなっている。

(2) 近くに安心して遊べる場所の有無が、幼児の発達や経験等にどのような影響を与えているかについてみる。

① 降園後夕食までの過ごし方についてみると、図1のように、近くに安心して遊べる場所のある子(以下「遊び場のある子」とする)は、外でよく遊ぶ割合

が高い。これに対して、近くに安心して遊べる場所のない子(以下「遊び場のない子」とする)は、家の中でよく遊ぶ割合が高い。ただ、15年前に比べると、遊び場のある子もいない子も、外でよく遊ぶ割合が大きく減少している(図2)。

また、夕食までの遊び相手についてみると、遊び場のある子はない子よりも、きょうだいや同年齢の友達、異年齢の友達と多く遊んでいる。これに対して、遊び場のない子はひとりで遊ぶ割合が高い。

② 「おはようのあいさつ」「ハミガキ」「着替え」の3つについて、「自分からする」を4、「大人にいわれてする」を3、「言ってもなかなかしない」を2、「大人にやってもらう」を1とした平均値をみる。遊び場のある子の平均値は「おはようのあいさつ」が3.54、「ハミガキ」が3.03、「着替え」が3.36で、3つの項目の平均値は3.31となる。これに対して遊び場のない子の平均値はそれぞれ3.48、3.10、3.15で、3つの項目の平均値は3.24である。項目によって違いがみられるが、全体としては遊び場のある子の方がいない子よりも生活習慣の自立が進んでいるといえる。また、15年前と比較すると、遊び場の有無による生活習慣の自立度の差異は減少している。

表1 子どもが安心して遊べる場所

	2002	1987
公園	78.4%	77.7%
空き地	18.1%	37.2%
道路	11.1%	12.2%
校庭	9.9%	12.9%
神社・寺	7.3%	15.9%
田畑	3.8%	3.5%
野原	1.4%	3.2%
砂浜	1.4%	1.6%
その他	8.9%	6.7%

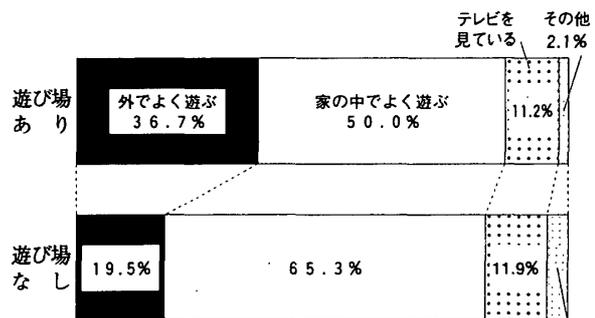


図1 夕食までの過ごし方 (2002)

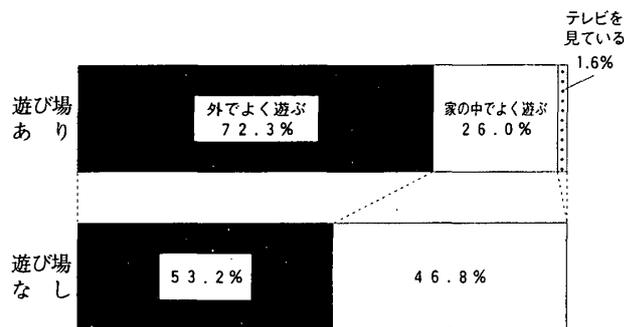


図2 夕食までの過ごし方 (1987)

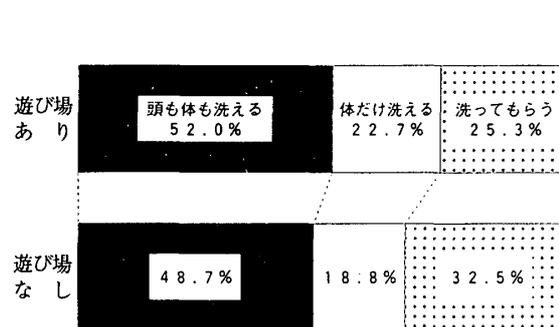


図3 風呂で一人で洗えるか

表2 一人で使えるものや一人でできるもの

	金づち	カッター	シャベル	ほうき	はさみ	栓抜き	包丁	かんきり	雑巾しぼり	ひも結び	%
遊び場あり	25.6	8.2	80.9	76.5	98.4	16.5	41.2	1.9	65.9	37.9	
遊び場なし	19.8	9.1	76.9	71.2	98.3	15.7	31.4	4.1	62.8	32.2	

③「お風呂に入った時一人で洗えるか」と尋ねた結果は図3のとおりである。遊び場のある子の方がいない子よりも一人で洗える割合が高い。

④日常的な道具等の使用能力との関連についてみると、表2のようになる。遊び場のある子はない子よりも、10の調査項目のうち8項目で「一人で使えるものや一人でできるもの」の割合が高い。また、「一人で使えるものや一人でできるもの」の平均値は、遊び場のある子が4.53であるのに対して、遊び場のない子は4.22である。15年前の調査では、遊び場のある子の平均値が4.93、ない子の平均値が4.64であったので、15年間で道具等の使用能力が全体として劣っていることが知れる。

⑤「かえる・ざりがにとり」「さかなとり」「木登り」「木の実拾い」「草笛」「たこあげ」「竹馬」「めんこ」「おはじき」「こままわし」「鬼ごっこ」「かくれんぼ」「すもう」「雪がっせん」「ままごと」「ファミコン・テレビゲーム」「登山」「キャンプ」「海水浴」「スキー」の20項目について、経験したことがあるかどうかについて尋ねた。経験したことがあるものの平均値は、遊び場のある子が11.11であるのに対して、遊び場のない

子は11.09であった。15年前は、遊び場のある子の平均値が11.30、ない子の平均値が10.88であったので、遊び場の有無による差異はかなり減少している。

III 結び

15年前の調査同様、近くに子どもが安心して遊べる場所があるかどうかの違いが、幼児の発達や経験等の違いにまで及んでいることが認められた。遊び場のある子は、ない子に比べて、外で友達等と遊ぶ割合が高く、総じて生活習慣の自立が進み、日常的な道具等の使用能力に長じ、生活経験が豊かであった。

しかし、15年前に比べて、遊び場の有無による幼児の発達や経験等の差異は減少していた。これは、近くに安心して遊べる場所があっても、外でよく遊ぶ子どもが大きく減少していることと関連しているのではないかと考えられる。

*15年前の調査結果については、間藤侑・大桃伸一「幼児期の生活実態調査報告書」(新潟市教育委員会発行 1988)を参照